

では「林檎の歌」が流行していますよと言って、
下手な日本語で歌って聞かせてくれました。
私は第三便に乗船して、昭和二十一年六月、和
歌山県田辺港に上陸、復員しました。五年六カ月の
軍務終了し、故郷の信州へ帰りました。

想い出をたどって 私のハルマヘラ戦記

福島県 五十嵐 正 幸

—私の軍歴—

昭和十七年 八月 徴兵検査第二乙種合格
十二月 一日 第十二航空教育隊に応召
昭和十八年 三月 第四百四戦隊へ転属
四月 第一航空路部転属要員
四月 十二日 広島へ向けて水戸出発
四月二十九日 宇品出航
五月 十六日 マニラ上陸
五月二十五日 シンガポール上陸
六月 八日 シンガポール出航
六月 十八日 スラバヤ上陸
昭和十九年

九月二十九日 ガレラ出航
八月 一日 ワシレ上陸
十二月二十四日 カウ絨毯爆撃

昭和二十年

三月二十九日 航空地区司令部に転属

昭和二十一年

五月 二十日 ワシレ出航
三十日 田辺港入港、復員完了
—私の身上—

大正十一（一九二二）年四月一日、旧慶徳村の
五十嵐家の次男として生を受け、兄弟は男二人、
女三人で家業は元ヤンマー農機具店「会工社」を
父と兄が経営しておりました。慶徳小学校を卒業
と共に喜多方中学に進み、卒業すると埼玉県の軍
需工場に入社、その後、蚕の生産に従事していま
した。

—召集令状—

昭和十七（一九四二）年八月、徴兵検査を本籍
地の慶徳小学校の講堂で受ける。そして第二乙種

合格の格印が押されたのである。当時、開戦より
一年近くが過ぎ、緒戦の快進撃も鈍りがちとなっ
た。五月には「コレヒドール島」を激戦の末占領
したが、八月には米軍は「ガダルカナル島」「ツラ
ギ島」へ上陸、徐々に反攻に転じてきた頃で、何
となく戦況に陰りが見え始めてきた。

徴兵検査も終わり、再び職場である埼玉の軍需
工場へ戻り、班長として南部式自動拳銃と戦車用
の機関銃の生産に昼夜を問わず従事していた。そ
んなある日、十一月二十日頃だったか、家から電
報で私の所に召集令状が来たことを知らせてきた。
遂に来るものが来たど覚悟はしていたが、徴兵検
査から三カ月、余りにも早いので少しびっくりし
た。

入隊は十二月一日、部隊は仙台である。あまり
日数が無い。早速、退職の手續に事務所へ申し出
ると「休職にしたら」と言われたが、しかし生還
は考えず、後に思いを残さぬよう退職とした。

一死以て国に報いるの精神の軍事教育を受けた

私達青年は、心底から生還は考えていなかったのである。そして職場の方々に志木町の料理店で送別会を開いてもらった。その時、途中トイレに立つ時に少しよろめいて、床の間の大きな床飾りの置物を倒してしまった。店主に申し出ると「これから応召される方から弁償なんてとんでもない。どうか気になさらずに元気で頑張ってください」と励まされ、皆ほつとして宴会が続けられた。

故郷へ帰る途中、少し回り道になるが上越線の土合駅で下車、もう二度と登る機会はないだろうと、十一月三日に友人と三人で遭難しかけた思いの山「谷川岳一の倉沢」に別れの登山をしまった。向い側の山の中腹から一の倉沢を撮影して、故郷の父母の元へ帰ったのは十一月末近くだったろうか。

十一月三十日早朝、町内の入営兵と共に地元の諏訪神社に武運長久を祈願し、入営先の違う人達ではあるが、共に駅頭で「では行きます」と挨拶をしました。そして万歳の声と旗の波に送られ、

る数人を除いて、それぞれ転属したり配置替えとなり、今までの緊張から解き放された新兵だけが、これから先の不安を隠しつつも外見はいたったのびのびと転属命令を待っていた。

いつ頃だったろうか、日曜日に父母が面会に来てくれた。日曜日は訓練は休みだったが、まだ外出は出来なかった頃だから入隊後一カ月ぐらい経ったころだろう。父が着ているオーバーを見ると、私が一昨年月賦で買い、入営の時着てきた物だ。背バンドの着いた若向きの物だ。あれっと思ったが着る物も不自由な時代でもあり、また私が二度と着る機会もないだろうし、暖かそうに着ている父の姿を見ると自然に微笑みが浮かんでしまった。考えてみれば毎月十円の月賦も父が送ってくれたのだから父の物同然だ。

面会所で持ってきてくれた「おはぎ」を食べたが、一人では食べきれず、ふと見ると面会所の片隅に一人の衛兵が立っている。良く見ると中学校で同級生だった長谷川君であった（彼は平成三年

郡山からは私一人となって仙台に一泊、翌日仙台玉浦村の第十二航空教育隊の営門をくぐりました。営門で付き添いの人は帰るように言われた時の父の悲痛な面影が臉に残っている。

早速、飯野隊の川端班に配属になり、蔵王下ろしの寒風の中、三カ月の自動車訓練が始まった。周りは広々とした田圃でうっすらと雪が積り、はるかに点々と村落や林が見える。その後の蔵王の山々は雪で霞んで見えなかった。

― 転 属 ―

翌日から訓練開始。私の兵科は飛行兵の自動車手である。これから自動車の運転と整備を覚えなければならぬと同時に、一般兵科の射撃等の訓練も修得せねばならない。忙しい教育期間の三カ月は瞬く間に過ぎ、一期の検閲も無事に過ぎる。この部隊は教育隊であるので他部隊への転属命令を待つだけとなった。

今まで鬼のようだった古兵も、人が変わったかと思われるほど優しくなり、再び教育要員として残に死亡)。彼は勤務中の身と一緒に食べる訳にもいかず、「おはぎ」の包をそつと彼の側に置いて来たことなどが懐かしく思い出される。

その後、外出も許可になって、小銭くらいしか持たない我々新兵は、喜び勇んで仙台へ遊びに行く古兵を横目に、二、三人連れ立って竹駒神社へ参拝し、茶店で饅頭をほぼぼって帰る真面目な新兵達だった。

その二月には郷土部隊、若松第二十九連隊がガダルカナルに上陸し、二千五百人の内、戦死者二千五百人という大損害を出して敗退した。それが飢と病気のためとか、何となく身の引き締まる思いがした。

三月半ばには、それぞれ転属命令が出て、満州や南方へと散っていった。私は最後に一人、すぐ隣にある第百四航空戦隊（現在の仙台飛行場）に幹部候補生として転属した。それから十日間ぐらいはただ忙しい思い出が残っている。

三月頃か、再び転属命令が出て、私は編成され

第一航空路部の要員として水戸へ集結を命ぜられた。集結地へ出発まであといく日もない日曜日、外出も出来ず家族への連絡も出来ず宮内で悶々としていると、外出の支度をしていた古兵が「おい五十嵐、お前家へ知らせたか。今度は南方のフィリピンかボルネオだぞ。二度と帰れないぞ」と言う。「いやまだです。ハガキは検閲がありますので出してません」「いいからすぐ書け、俺が仙台から出してやる」とハガキ一枚をよこした。勤務には厳しい古兵だが、根は優しい人で暖かい心が身にしみ、私も今後、この心を心としてやっつていこうと誓ったのでした。

古参兵の親切で家へは連絡出来たが、出発は深夜で、常磐線回りのため、最後に一目だけでも会いたいと寒い郡山駅のプラットホームで待ち続けたであろう父母の姿が目に見え、胸が痛む思いである。

水戸の東部第百三部隊「第十一航空教育隊」で第一航空路部の第二次編成の第三飛行場中隊に編

入された。
この部隊は第三航空軍の隷下に入り、本部をマニラに置き、比島とニューギニア間の航空輸送保安の勤務に就く部隊であり、すでに二月五日に第一次編成は終わり、第一、第二飛行場中隊保安中隊の四個中隊は二月二十五日、宇品から出港し、マニラ、ニューギニア方面に展開していた。

四月五日に編成は完了し、ここでは「陸王の側車」(サイドカー)を受持ち、たまに将校や下士官を乗せて水戸市などへ連絡にでるのが仕事だった(その頃まだ車は配置になっていなかった)。

四月十二日、窓のシャッターを下ろした列車に乗って、貨物線を通って広島へ移動した。広島では相生橋近くの旅館に泊まり、毎日、橋を渡って練兵場へ行き汗と埃にまみれての訓練に明け暮れた。その内、宇品港から輸送船に乗り組んだが、船団を組むためなかなか出航せず、狭くて暑苦しい船倉暮しで「しらみ」が湧き、湾内に在る島の島の検閲所へ入浴と消毒に二、三度行ったのを

—南海へ—

思い出す。当時お世話になった広島の旅館付近が原爆の爆心地となり感無量である。

いよいよ四月二十九日、船団を組んで宇品港を出航した。何隻の船団か記憶にないが、七、八隻でなかったろうか。もちろん海軍の艦艇の護衛付きである。我々の乗った輸送船は何千トンあるか、山育ちの私には分からないが、相当大きな客船だったように思う。三つ四つある船倉の正面を除く三面に(正面は嵐の時雨風の当りが強い)木材で三段位の棚を造り、棚の正面には垂直に木製の梯子が数本ずつ掛っていた。棚のあちこちに裸電球がぼんやりと灯っている。

私たちは二番目の船倉の上の棚で、舷側を背にして右手が船首だったと思う(右舷)。舷側の足元に装具を置き、中央に頭を向け横になる。隣の兵隊と肩が重なるほど狭く、天井も低く頭を屈めて歩かなければならない。それでも上の「ハッチ」を開いている間は良いが、雨や嵐の時は船倉の「ハ

ツチ」を厚い板で塞ぎ、その上にシートをかぶせるので、その蒸し暑さは地獄の苦しみで、少々の雨や嵐にもそのままで過ごした。

こんな状態の中で沈没などとなったら、一番下の棚の兵隊などは逃げ出すことは不可能だろう。士官は冷房の客室に入って船旅を楽しんでいるだろうが。便所は水洗の内便所があるが、我々兵隊は前後甲板上の両舷側から海上に張り出して造られた仮設便所である。

用を足しながら下を見ると、太平洋の荒波がたちまち排泄物を持って行く。まことに雄大な水洗便所だが、気の小さい者は出る物も出なくなる。甲板から見ると数隻の貨物船が縦一列に並び、辺りを駆逐艦が白波を蹴立てて走る様子は「ああ堂々の輸送船」の軍歌のごとく頼もしい限りであった。

途中、敵潜水艦にも会わずに順調に航海し、夜は南十字星を見て台湾の高雄に寄港した。ここで食料その他を補給する。珍しい「乾燥バナナ」を

食べて南方にきたことを実感した。すぐに出港、マニラに入港、ここで自動車やその他の機材・物資の受領のため二十日くらい駐屯した。

隊長や下士官を乗せて、配備の新しい日産の一八〇型トラックで市内を走る。ビーゲンビルなど原色の花が咲き乱れ、高い椰子の木に囲まれた白い壁の家が多く、埃っぽく暑かったのが印象に残っている。

—マニラへ—

比島マニラは昭和十七年一月に陥落したが、バターン半島及びコレヒドール島では頑強な敵の抵抗に遭い、ようやく完全制覇したのは五月に入ってからであった。一年後の現在は、そのような激戦の跡はなく、平和に見えた。一日交代でトラックで二キロ離れた他の部隊の炊事場へ、我が部隊の食事を運ぶ「飯上げ」に、同じ中隊の運転手と出掛けるのが毎日の日課だった。これは我が部隊は通過部隊なので、現地駐留部隊の給与を受けていたのである。

ワーを浴びたりというのんびりした船旅だった。前方の空に黒い雲が急に広がり、スコールの来るのがわかると、石鹼を体に塗って待ち受け、甲板上が大きなシャワー場になる。時には急に雲が晴れて、船上には一滴も降らず慌てたこともあった。しかし洗濯は満足に出来ず、全員虱の巣となり、毎日虱取りのコンクールが甲板上で繰り広げられた。

海水はポンプアップで常時出ていたが、硬水用石鹼では綺麗にならなかった。居住は前回同様船倉で、相変わらず狭く暑苦しく、今回は甲板に積載した自分のトラック内に居住した。その分船倉が広くなるので古兵からの文句も出なかった。

シンガポールではトラックと側車を受け持ち、毎日のように外出した。道路が日本と違って広い舗装なので、よく飛ばし、同乗の隊長に「あまり飛ばすな」と注意されたことも度々あった。ようやく車に馴れて一番飛ばした頃だった。

ある日の夕方、仕事が終わって宿舎の裏で手入

ある日の午後、昼食の「バック」を返納し帰って来ると、留守の間に私に面会に来た他部隊の兵隊が、留守と知ると「また出直して来ます」と言って帰ったという。どこの誰か名前を聞いておらず気にしていたが、二度と尋ねて来なかった。しかし人相等から、その後フリーピンで戦死したW君でなかったかと考えられ残念でならない。

彼は義姉の弟で、召集前は横浜の会社に勤めており、私と同じく徴兵検査で第二乙種に合格した。検査後二人で新潟県の豊実から飯豊山に登り、霧のため一泊が二泊になり、親兄弟に心配を掛けたりしたこともあったが、同じ部隊に召集になっていたとは知らなかった。

ある日、酒保で偶然に会い、何か食べ、二人で撮った写真が古いアルバムに残っている。私と中隊が違い普通科中隊だった。五月二十一日再び輪送船に乗り、シンガポールに入港した。

途中の航海は、制海権も制空権もまだこちらにあり、兵器の手入れや、毎日来るスコールのシャ

れの終わった側車を試運転中、椰子の切株に車を乗り上げて転覆し、怪我は無かったが側車を少し壊してしまった。兵器係軍曹に「こっぴどく怒られた。その時は別に処罰はなかったが、幾日か過ぎ一選抜の上等兵に漏れたのはこの時の事故のためとか。その後、戦友が民間の車と衝突して車を壊してしまったので、兵器係軍曹と二人で山下將軍の会见で有名なフォードの自動車工場へ修理に行った。私が事故車の方に乗って軍曹が牽引して行ったが、牽引されるのも難しかったのを覚えている。あの工場を見たのは私の部隊では二人だけだった。

—ジャワ島へ—

六月に入った。日本ではそろそろ暑くなる頃だが、こちら南方では年中夏の陽気で日差しはたまらないぐらい暑いが、湿気が少ないせい汗が洗われるほどではない。特別勤務がある訳でなく、毎日のんびりと過ごしていた。しかしそんな呑気なことは言っていられない事態に戦局は追い込まれてきた。

五月二十九日、アツツ島の日本軍が玉砕し、二千七百人近くが戦死した。同日キスカ島の陸軍は海軍の協力で一兵も死なせず無事撤収することが出来た。アメリカ軍の反攻が次第にエスカレートし始めたのである。私達は昭和十八年六月八日に、また輸送船に乗せられて南下し、途中なにごともなく赤道を越え、十三日にジャワ島のスラバヤ港に入港上陸した。

ここでも待機、一体我々の任地はどこなのか、そしていつ目的地に着くのか、我々兵隊は誰も知らず、毎日私はただ飯上げと隊長や下士官を乗せての見物がてらの連絡の毎日だった。

休日もあり、外出しては安い革製品を買った。私は側車に乗るのに重宝な革脚絆や小形図囊を着ける幅広の革バンド、それにゴム靴三足を買った。靴は車の工具箱に入れて置いた。これが後で大変役に立った。

当時私達の被服は正規の軍衣、軍袴一着の外、半袖の防暑衣と半袴が一着だけだった。半袴はと

乗せ、平坦な広い舗装道路を時速八十キロで飛ばし、一時間半ぐらい掛って無事にマランに着いた。

マランの街はオランダ人の上流階級の別荘地で、高級な住宅や別荘が点在し、高地のためか気候も涼しく日本の軽井沢みたいな町だ。住民のオランダ人は全員収容所へ入れられ、今いるのはインドネシア人の留守番だけのはずだ。軍曹の指示で車を進めたが、別にはっきりした目的があるのではなく、ガレージのある立派な家の前で車を止めた。玄関に入るとインドネシアの老人が出てきた。日本語は分からないと顔の前で手を振る老人に、軍曹は公用証を見せ、手真似で自動車はあるかと聞く。老人は領きガレージに案内した。灰色の小型の乗用車があり、キーを出させてエンジンを掛けてみると調子は良く、ガソリンも満タン近く入っている。

当時、日本では自動車は少なく、メーカーもトヨタ、ニッサン位で、もちろんこの車も初めて見る車だ。エンジンは四気筒で一〇〇〇ccぐらいだ

にかく、防暑衣（シャツ）は車に乗るので背中が汚れ、何度洗っても黒いしみが付き、外出には肩身の狭い思いをしていた。こんな時、隊長の蒔苗少尉が軍服を新調し、当番兵の私と加藤も半袖、半ズボンを作って貰い、他の兵隊達にうらやましがられた。

毎日退屈していた時、名前は忘れたが飛行隊の軍曹が隊長達と仲良くなり、毎日宿舎へ遊びに来るようになった。聞くと戦闘機の搭乗員だが空中戦で負傷して入院、傷は治癒したが何となく臆病になり退院せずにいるとか卑怯な奴と思ったが、人柄のせいかなり憎まれもしなかった。

実際には隼戦闘機で、交戦中負傷し不時着したものの、執拗な敵機の攻撃を受け、立木を盾に逃げ回り九死に一生を得たという。

ある日、隊長から「五十嵐、軍曹と一緒にマランに行つて来い。用件は軍曹が知っている」と、公用外出証を渡された。マランはここスラバヤから南へ百二十キロぐらいのところにある。軍曹を

ろうか。私の目的はこの車らしいが、軍曹は家の部屋も案内させた。立派な家具や装飾品もいろいろあったが手は触れず、老人に「この車を持っていく」と言つて、持っている通信紙に「借用証 車 一台 期間勝つまで 借主・名無権兵衛・月日」と書いて老人に渡した。人を食った借用証である。今考えて見ると省みて悪いことをしたものだと思省している。

それから数回にわたり乗用車やオートバイを運んだ。そのため我が隊の下士官以上はそれぞれ車やオートバイのオーナーになった。中には宿舎の中でオートバイを乗り回し、運転未熟で間仕切りに立てた柱や天幕をなぎ倒す下士官もおり、おかげで私はてんでこ舞いをしなければならなくなった。エンジンがかからない、パンクした等、その都度直してやらなければならない。隊長や下士官から頼りにされ重宝がられていた。

―任地へ―

ようやくスラバヤの町に馴れた頃、最後の任地

に向けての出発の命令が来た。九月八日、ジャカルタ行きの鉄道の無蓋車に車や機材を積み、我々は有蓋車にて出発する。部隊の本隊は船でジャカルタに向かった。

薪を炊いて走る鉄道をのんびりと、昼夜通して約七キロの距離を、何日掛ったかは覚えていない。途中、あまり人家のない駅へ停車してトイレ休憩、線路に降りて立小便、食事は貨物線のホームに停車した。すると現地の子供が果物、バナナの葉に包んだ御飯、椰子の実等を買ってくれと差し出す。買って食べたか記憶にはない。

ジャカルタに着きスラバヤから回航してきた貨物船に機材を積み込んだ。機材が多くて例の乗用車などは積み切れなかったようだ。

九月十二日、最後の航海である。船はこの貨物船一隻だけで今度の航海は船はもろん島影も見えず、イルカの群れが船尾を追い掛け追越して行くだけだった。敵潜水艦を警戒しジグザグコースを取りながら進む。護衛の駆逐艦もなく心細い一

動かない、しびれを切らした私は警笛を鳴らすと、エンジンをふかして一気に浜に上がった。

びっくりした彼等は蜘蛛の子を散らすように逃げ去り、その後また彼等を集めるのに苦勞をした。彼等は髪の毛は黒く短く縮れ、上半身は裸で腰から下をスカートのような布でコーヒー色の体を包み裸足である。

どうやらトラックに機材や人員を積んで出発する。隊長が先頭車両に先駐の将校と乗り、案内を受けながら進む。これに各車両が続く。道路は海岸から見えた山並の向こうらしく、車の通ったことのない赤土のほこりっぽい道路で、歩いて息の切れそうな急な坂がいくつもあり、そのつど兵隊は降りて車を押す。二時間近くかかって、湖の側の椰子林の中に建つバラック建の兵舎に着いた。

細長いバラックで柱は丸太、屋根は現地人の住所と同じく椰子の葉で編んだアタップで葺いてあり、床は五十センチほどの高床で、椰子の幹を割って敷いてある。海岸で見た現地人の小屋と大差

週間の船旅だった。最後の目的地ハルマヘラ島のガレラ港に無事入港した。

—ガレラ—

船上から見ると目の前は白砂青松とは言い難いが、珊瑚の砂浜が白く輝き、並び立つ高い椰子の葉の緑が風に揺れている。その奥に低い山並が連なって、左手の方は溪が無くなり、黒々とした溶岩の崖となつて海に落ち込んでいる。崖の上は濃い緑のジャングルに覆われ、その奥に頂上は見えないが活火山があるらしく、灰色の煙が高く立ち昇り、不気味な鳴動が空気を震わしている。酷いところへ来たもんだと、明るい周りの景色と裏腹に、気の重くなつたのは私だけだったろうか。

港と言っても立派な栈橋がある訳でなく、歩くと揺れる。機材陸揚げには丸太船二、三隻並べて丸太を渡した上にクレーンで積み込みする。機材を積んだトラックもこれに乗せて浜に着け、物珍しさに集まった原住民にロープを引かせて陸揚げしようとしたが、原住民は全力を出さずさっぱり

ないが、すぐに休め、雨が凌げるだけでも満足である。先に上陸して兵舎を設営した部隊は、原住民を使って建ててくれた由で、感謝して軍の装具を下ろした。宿舎も狭いので次第に宿舎・車庫等を増築し、また宿舎の脇に小さいが隊長室も建てた。宿舎の裏の湖水端に炊事所を造り、水は崖下の湖の水を使うことにした。

私はその頃から飛行場中隊から保安中隊に配属替えとなり、通信士の加藤と二人で、引き続き蒔苗隊長の当番を命ぜられた。加藤君は二十四時間交代勤務であり、私は毎日昼間だけの勤務で、二人合わせて一人前だったも知れない。

その後飛行場の保安の両中隊の自動車手は、ガレラ港に陸揚げした機材や特殊車（飛行機の始動車）や燃料タンク車等の運搬に忙殺された。通信所も開設されいよいよ本格的な任務に就いたのでした。

—給水車—

兵舎は広い椰子林の中の小高いところに建てら

れ、南向きではあるが薄暗い。兵舎から五十メートルのところは平屋ではあるが大きな家がある。元郡長の家だが、今は先に上陸した設営部隊の将校宿舎になっている。隊長はたまに行っていたようだが、我々兵隊は立入禁止だった。

兵舎の裏はすぐ崖になっていて、その下がタカラン湖になっている。現地人の話ではここにはワニが住んでいると言うが、残念ながら私は最後まで見なかった。底は見えず大分深いらしい神秘的に青く澄み、椰子の木の樹影を映している。この水運び上げて炊事や飲水に使うので、この水汲みは当番泣かせの重労働であった。

夕方仕事が終わわり、この崖を降りて水浴びをし、帰りにはバケツ一杯の水を汲んで帰る。水浴びした同じ場所の水を飲水にも使うなんてことは、現代の生活では考えられないことだが、これが戦争であり、戦地であるから水が有るだけでも幸いと言わねばならなかった。後日、給水車が来てからは、水汲みは私の仕事になった。朝、自分の仕事

った床板なので、近くの葦原から葦を刈り、毛布に詰めたわら布団を使って貰った。翌日の朝、喜んでくれるものと当番勤務に行くと、一晩中寝られなかったと目をしよぼしよぼさせて「初めは快適だったが、だんだん火照ってきて眠れず、仕方なく元の床に寝た、もっと枯らしてくれ」と言われた。「素人の浅はかさ」「堆肥だつて積んでおけば、湯気が立つほど火照る」。早速良く乾燥させて作り直した。

その頃、米軍は次第に反撃の勢いを増し、北方のアツツ島、キスカを攻略し、今度は矛先を南方に向けて来た。昨年暮にはニューギニアに上陸して、次第に日本軍を奥地に追い詰め、制空権を失った日本軍は各地で敗退、または玉砕するという悲惨な戦闘が続いていた。いよいよ米軍の蛙飛び作戦が始まったのです。

この前線への補給や連絡のため、戦闘機や連絡機がガレラの飛行場へ飛来することが多くなった。これらの搭乗員の宿舎、無線連絡、機体の整備を

が終わってから給水ポンプと濾過装置の付いたタンク車で水汲みに出かける。

兵舎の近くからは崖で降りられず、遠く湖の反対側まで行き、湖水の水をタンクに溜めて兵舎に運ぶ。ほとんど一人で一日一往復の仕事だった。

道路は酷く、スクールの後は泥んこ道になり、重い給水車がめり込んで、近くの兵器廠の牽引車に上げてもらったことも再三あった。この時は給水車を軽くするため、せつかく汲み上げた水は排水してしまふので、また汲まねばならず泣きたくなつたことも再三あった。

そんな苦労もあつたが、幸いにも中隊で唯一の自動車手だったからか、炊事当番と不審番には就かずにすんだ。隊長当番は毎日の勤務も忙しくなり、私の帰りが遅いと隊長に迷惑をかけるので、加藤と反対番の土屋に協力を頼み、三人で一人前の当番となった。

ある日、三人で相談して隊長にわら布団を作ることにした。隊長も我々と同じ床は椰子の幹を割受け持つ第一航空路部の仕事も多忙になり、飛行場中隊は飛行機の発着、整備、宿泊の準備に追われ、保安中隊は無線連絡に昼夜勤務だった。私は通信所へのバッテリーの運搬や交替通信員や宿泊搭乗員の送迎などが主任務だった。飛行場は兵舎から約三キロ、茅の生え茂る原っぱに二千メートルぐらいの無舗装の一本の滑走路があり、ここには飛行場中隊のピット、保安中隊の方向探知機があるだけで、風に揺れる吹き流しが飛行場であることの証しだった。

付近には黒い野豚や鹿が生息しており、勤務明けの通信員を乗せて兵舎への帰り道、野豚を追い掛け回したりしたが、運転席からは茅のため前方が見えず一頭も捕れなかった。鹿は逃足が早くピョンピョンと逃げ回り小高い丘で止まってこちらを眺めまたピョンピョンと走り去る。

―ドラム缶運搬―

飛来する飛行機が増えるにつれて、陸揚げしてある波止場から補給する燃料を飛行場中隊の兵二

人で運搬することになった。今までも時には運んでいたのだが、今度は専門に運ぶことになった。朝交替要員の送迎が済むと早速、ガレラ港へ行き、二人でドラム缶を三本積み出発する。これ以上では途中の坂道が登れなくなる。飛行場近くのパイヤ畑や雑木材にトラックを尻から突っ込んで降ろす。降ろすのは簡単だが、一日二往復六本が一杯だった。

最初の一日が終わり「六本運びました」と報告すると「六本じゃ足らん、もう少し何とかならんか、車と兵隊も増やせんが頑張ってみてくれ」という。二人して考えたことは、二回運び終わってから、また波止場に戻りドラム缶を積んでそこに野宿する。

翌朝、飛行場へドラム缶を降ろし、兵舎に帰って朝食と人員輸送後、また波止場へドラム缶を積みに行く。こうすれば三回で九本運べた。しばらくこうした状態が続き、朝晩の点呼には出ず、当番勤務も加藤と土屋に任せ切りになった。

マランからオートバイを運んでやった炊事班長の早乙女軍曹から、加給品のチョコレートを一箱貰い、子供達に一枚の半分ぐらいずつを分けてやると大喜びで手伝うようになった。

子供達が馴れるにつれ、村長の家に呼ばれて夕食を御馳走になる機会も多くなった。村長の家は村の端に在り、部落では唯一の木造建築で平屋だが、ちゃんとした板も張ってあり、竹の寝台やテーブルも置いてある。村長は白いスーツを着てサングラス履きである。食事は土間のテーブルで、祭や祝事にしか炊かない陸稲の米を炊き、焼き魚、煮魚、魚汁、青い三角バナナの唐揚げ、その他果物等で、調味料は塩である。

魚汁は塩味で、真赤になるほど唐辛子が入っている。慣れない私達が「はあ、はあ」言っただけで食ってのを見て、子供達がゲラゲラと笑っている。せっかくの御馳走を吐き出すわけにもいかず、四苦八苦の御馳走だった。

それから子供達は私の名前を「イガラシさん」

こうして毎日波止場に泊まるうち、村の人々とも顔馴染みとなり、カパラカンボン（村長）の家へ呼ばれてコーヒー等を頂くようになった。夕方飛行場から波止場に戻り、持参した米、味噌で飯盒炊きし、南国の明るい大きな月の下で、また南十字星を眺めながらの夕食は、戦争を忘れさせる一時であった。

また、村人や子供たちが自動車を集めるようになった。子供達は車に乗せてくれとせがむようになり、飛行場の集積場まで乗せて行くと、お札にドラム缶積みを手伝ってくれる。こうしてドラム缶を積んで上乗りしては集積場まで行くことが多くなった。

ある日、隊長がこれを見付け「おい五十嵐、その子供達はどうしたんだ」と聞かれ「ハイ、子供達がドラム缶の積み込みを手伝ってくれるんで、せがまれて乗せています。人手の足りないのは隊長も知っているので「無理に手伝わせるな、チョコレートでも分けてやれ」と。そこでスラバヤで

が「トウガシさん」に変わってしまった。特に村長の次男で十二、三歳の坊やは、私達と一緒に車の下で寝るまでになった。

そのころ、ニューギニアに上陸した米軍は猛反撃に移り、弾薬も食料も尽きた友軍は、次第に西に後退し、敵との戦いよりも飢餓との戦いに苦しみ、餓死者や自決者が、山間の細い道路沿いに累々と倒れ伏していると、連絡に来た将校が涙ながらに話してくれた。

ここハルマヘラにも敵機が偵察に来るようになり、不気味な双胴のP-38が銀色の翼を広げて空を飛び回るようになった。

前線へ送られる飛行機や連絡機の中継の飛行場として、このガレラの飛行場を利用する飛行機も増えてきた。それにつれ事故も増え、爆撃機が故障で墜落し、五人の搭乗員が死亡した。現場から死体を飛行場の端の急造の火葬場へ運んだ富樫自動車手は、一人の搭乗員は首が胴体から離れ、トラックの荷台をごろごろ転がり気味悪かったと、

青ざめて話していた。後で血糊の掃除も大変で、いくら洗っても血生臭いとぼやいていた。その夜私は屍衛兵を勤めた。

―飛行場勤務―

友軍操縦士の質が落ちたのか、離着陸時の事故機が増え、せつかく前線で待っている飛行機を壊してしまふ。とくに三式戦闘機「キ―61」の事故が多かった。この機は液冷エンジンのためか機首が長くて重いらしかった。幸いにも死んだ者はいなかった。

ある時などは、離陸のため滑走を始めたが、離陸直前に前のめりに転覆し裏返しになってしまった。慌てて駆け付けると、操縦士はシートベルトのために逆さになっていたが無事であった。そして後を指して何か叫んでいる。尾部に回り持ち上げながら胴体の中を見ると、狭い胴体の中に一人の下士官が蟹みたいに泡を吹いて気絶していたこともあった。

そのうち敵艦載機の空襲があるようになり、海きを締め軍刀を脇に、首に巻いた白いマフラーを風になびかせながら零戦に飛び乗り、風防を閉める間も惜し気に掩待壕から滑走路を斜めに使って、真っ直ぐ飛び立っていった。あの日の丸の鮮やかな零戦の勇姿が今も臉に焼き付いている。

私達と同年代か、もつと若いあの零戦の勇士達は、何人生きて故国へ帰れたであろうか。多分全員大空に散っただろうと思うと胸が痛む。

私達の隊にも補充兵が来た。制空権も制海権も奪われ、輸送船の到着率二〇%の厳しい中、生きて上陸出来た幸運な連中である。補充兵の年齢は三十六、七歳故郷には妻や子供もいる年齢である。主として飛行場の整備や運搬の助手として勤務していたが、どこかの戦場にいるであろう十歳年上の兄の姿とだぶって、どんなことがあっても手を上げることは出来なかった。

―転進―

戦局はますます悪化の一途をたどり、昭和十八年十一月にはマキン、タラワの両島が玉砕した。

軍の零戦が五、六機待機して迎撃するようになった。ペラ回しや燃料補給に飛行場中隊の自動車手は手が足りなくなり私も手伝いを命ぜられた。

朝の仕事を済ませ、飛行場でペラ回しの練習をした。何本かの椰子の木に廃物のプロペラを縛り付け、そこへ始動車を正確に寄せて、車の上の回転軸のフックを助手がプロペラのフックに連結する作業である。

車の運転は自信があった私も、初めは上手く行かず「こら、そんな事では飛行機が壊れてしまふ」と怒鳴られたりしたが、練習の甲斐あってどうにか出来るようになった。

こんな時、突然敵の艦載機の銃撃を受けたことも一回あった。その後、零戦もセル始動の新型機が配備になり、始動車の必要はなくなった。私のペラ作業も終わりとなった。

上空を警戒中の友軍機が突然急降下して、飛行場上空で機銃を乱射して敵襲を知らせると、ピットにいた搭乗員は飛行帽も被らず、日の丸の鉢巻

ここガレラの飛行場には前線に行く味方機も来なくなり、時たま連絡機が飛来する位になる。その頃、蒔苗隊長にセレス島のメナドへ転進命令が出た。たまたまマリアで発熱して寝ていた隊長は、熱が下がり次第出発することになった。そんな日の午後、私はスコールの直後、送信所へ数個のバッテリーを運ぶため、トラックで隊長室の脇の道で登り切れずにいた。

その時、隊長の当番の永島が出てきて「おい五十嵐隊長がうるさいから止めろと言ってるぞ」と言ってきた。「任務が大事だ」と聞かずにまたやり続け、ようやく坂道を上った時、隊長が軍刀を杖にして出て来て「運転手は誰だ、五十嵐か今まで可愛かったのに俺が転属するんでもう俺の言うことなんか聞けんのか」と杖にしていた軍刀で肩と腰をこっぴどく殴られた。鞘が割れるのではないかと心配したが革包の鞘は割れなかったが二日ぐらいは歩けなかった。

二、三日して隊長の熱も下がり、メナドへ出発

する日が来た。ビッコを引きながらも努めて元氣そうにして加藤と土屋が荷物のまとめを手伝った。隊長は黙って連絡機で飛び立っていった。数日後メナドから私達当番宛にビーサンバナナ等をどっさり送ってくれた。世話になったと添書もなかったが、嬉しい気持ちに私達は心にしみこんだ。

その頃、大本営では伸び切った戦線の縮小を図り、最後の防衛線を東ニューギニアからハルマヘラ、セレベス、フィリピンの線にして、満州から関東軍を転用してその充実を図った。そのためカレラの南カウに海軍の飛行場を造り使用を開始した。敵機の偵察や空襲も激しくなり、特にガララの対岸のワシレはよく爆撃された。

当時、島の状況は何も分からず、ワシレは一番大きな基地だったことは後日知った。積んで置いた食料等も爆撃され、燃えて、敵機に見付けられぬように椰子林に野積みし、シートの上をさらに椰子の葉などでカモフラージュして置くのだが、スコールでシートに溜った雨水が太陽の光線に反

波止場に整列した時、左手の山を掠めるように低空で数機の敵機が来襲し、爆撃と機銃掃射で息もつけない状態がしばらく続いた。我々は防空壕の場所も分からず慌てて波止場から離れて、大木の根元に頭を突っ込み震えていた。

どのくらい経ったか、爆音も遠くなり、恐る恐る首を伸ばして見ると、湾内に停泊していた数隻の貨物船が半ば沈没したり横倒しになり、真黒な煙を上げて燃えている。湾内は煙で暗く、そして私達が乗る予定の貨物船の姿は見えず、栈橋も爆破されて空襲の激しさを物語っている。幸い我が隊には一人の怪我人も出なかった。いつのまにか工兵隊による仮栈橋の架設が始まった。空襲には慣れているらしく、また壊されたと言うような顔をして黙々と作業をしている。

夕方になって栈橋も出来た頃、逃げ回ってどうやら爆撃から逃れた我々の乗る貨物船が入港してきた。夕闇と煙で暗い中の乗船が始まった。私達十数人いた病人は狭くて細い仮栈橋を杖と戦友の

射して敵機に知られてしまう。それほど敵機は低空で綿密に偵察していたのである。食料も不足し始め、そこへ私はマラリアに感染し、発熱が続いた。四十度の高熱で、班員全員の毛布を掛けても、戦友四、五人が上から押さえても震えは止まらず失神してしまった。何分後によりやく震えが収まり発汗があつて、ようやく人心地が着く。そんな状態が三、四日おきに襲って来る。食事も進まず、栄養不足に脚気を併発、歩行もおぼつかなくなってくる。

―ボルネオへ転進―

我が隊にボルネオへの転進命令が出た。我々は第一線部隊ではないので後方への転進ではあるが、制空権も制海権も失った現在、かなり困難な移動になることは予測された。

集結地は対岸のワシレ港、戦友の肩にすがり杖をついてワシレに向かった。出発したのは昭和十九年七月三十一日で、ワシレには八月一日到着した。ここで大きな船に乗り換えてボルネオに向う。

肩が頼りでは渡れず、ハテタバコの飛行場まで行き、我が部隊の飛行機に乗ることになった。

乗船の終わった貨物船は汽笛も鳴らさず、真暗な沖合に姿を消して行つた。無事セレベス島のマカツサルに着いたと後で戦友から聞かされたが、加藤とは永久の別れとなった。飛行場まで何キロあるか分からないがワシレ湾の崖上の道を助け合いながら北へ進んだ。

左手下にワシレ湾を見下ろし、船の火災が収まったのか黒い煙が棚引いている。月もない星空だつた。やがて湾を過ぎて左手に太陽が見えて、夜が明けて来た。九時頃だったろうか、爆音と共に重爆撃機「呑龍」が一機機首を上げて西の空へ飛び立って行くのが見えた。尾翼を見ると、三色の我が隊のマークが朝日に映えている。我々は本隊から取り残されてしまったのだ。皆その場へたり込んでしまった。

その後の記憶はないが、第二十九航空基地司令部のワシレ派遣隊に世話になったように思う。私

一人は正式に本部に転属になり、引率は菊地伍長だったと後日の戦友会で本人から聞いた。

―モロタイ島玉砕―

地区司令部のワレシ派遣隊は、ワレシ湾波止場の後の山の中にあり、小さな暖流の流れる急斜面に小さなバラックが五、六棟段をなして建っている。小野寺、山本の予備士官と見習士官上がりの青木少尉などの士官が、それぞれのバラックに陣を取っていた。我々は上の方のバラックに収容され、そこが病室となった。この病室には五、六人いたと思うが、竹本上等兵だけしか思い出せない。ここワシラには度々空襲があり、その都度、病室の床下の流れる川の谷間に身を隠すのだが、足の立たない我々ははったり転げたりしながら退避した。

主として銃爆撃は波止場の方なので、次第に退避するのがおっくうになり、どうにでもなれと退避しなくなった。腹が減ってたまらず豊富にあつた消化剤を食べたがかえって腹が空き、二度と手

機の敵機が飛び回り、動く物、煙等を発見すると、直ぐに銃爆撃を加えてくる。時には数機で来るが、迎え撃つ味方の飛行機はなく、されるがままだった。高射陣地は健在であったが、度々の迎撃で砲身が磨滅して発射した砲弾がとんでもないところで炸裂する。表に出ていると大変危険である。炸裂した破片がばらばら落ちてくる。敵機の銃撃や味方の高射砲弾の破片から身を守り敵機の去るのを待つしかない。

敵の「蛙飛び作戦」はハルマヘラ本島は占領せず、喉元のモロタイ島に飛行場を建設し、ハルマヘラの監視と爆撃で、本島の軍事力を封鎖しようとしていた。そうであれば、ハルマヘラへの敵上陸はないだろうから、銃爆撃から身を守ればいいと思うと少し安心した。身体も大分良くなったので青木少尉の当番を命ぜられた。間もなく少尉殿と私にセレベスのメナドへの転進命令が出た。

―月光機―

我が軍はモロタイ島を奪還すべく反撃に出た。

を出さなかった。マラリヤの菓のキニーネは充分に有り、徐々に回復に向かった。しかし併発した脚気は栄養不足もあって、便所へ行くにも杖をついて手摺りにつかまり、天井から下げたロープにつかまり用を足す始末で一番苦しかった時であった。そのうち足の方も大分回復し、杖無しでも歩けるようになった。

その頃、戦況は不利になり、サイパン、テナアン、グアムが玉砕し、米軍は九月十五日に目の前のカウ湾の入口に浮かぶモロタイ島に上陸し、迎え撃つ友軍を撃破して、飛行場をまたたく間に造ってしまった。我が軍の場合はスコップ、トラック、ツルハシぐらいが道具だが、彼等は当時見たこともない巨大なブルドーザーで木の根を起こし、荒地を整地して、鉄板の網を敷くという話で、その機械力には到底太刀打ち出来なかった。この戦闘で我が軍の戦死者は千七百数十人を出し、我が隊の分遣隊も万歳を無線に乗せ玉砕した。

その後は、一日中必ずハルマヘラ島の上空を一

船は数少ない大発か漁船で、昭和二十年五月まで決死の切り込み隊が十一回も逆上陸を計ったが成功しなかったという。また空からメナドの海軍夜間爆撃機「月光隊」が攻撃したが、優勢な対空火器に阻まれて、昼間の攻撃は出来ず夜間攻撃をしていた。夕方メナドからカウに飛来し、月の出と共にモロタイを攻撃していったんカウに着陸する。翌朝早くメナドに帰る。青木少尉はそれに目を付け連絡の上メナドへの帰りに便乗させて貰うことにした。

二人でワシレの派遣隊を離れ、カウ飛行場の近くの海岸の椰子林の中の空兵舎に入り、自炊して便を待つことになった。月光機は毎日来ない、月の出る夜だけである。夕方海岸に出て見ると、三機ほどが左手カウ湾の入口を海面すれすれの低空で翼を振りながら飛んでくる。そして目の前を通過し、右手奥の飛行場に着陸する。それから三十分後、モロタイの方から爆音がして敵の双発の爆撃機一機が姿を現わし、飛行場を爆撃した。

爆弾の音がズシンズシンと腹を揺すり、口惜しさが増す。聞くところによると月光機は着陸後直ちに掩待壕に入るので損害はないが、滑走路は穴だらけになり待機していた兵がトラックに満載して置いた空ドラム缶を穴に投げ込みスコップで地ならしをして月の出と共に月光機を送り出す。

リーダーか、あるいはスパイの通報か、それが月光機の来た夕方は必ず月の出と共に、月光機が攻撃に飛び立ってから間もなく、薄墨で眉を画いたように見えるモロタイ島の上空に、花火のように対空砲火が輝き、時には地上に爆弾の炸裂する閃光も見えた。音は聞こえないが、夢の中の光景のような感である。月光機が帰って来る。ようやく眠りに着くのである。

しかし月光機は、いつでも無傷で帰れるわけではない。未帰還機もあり、また飛行場に着陸しても破裂音がしたり、撃ち残した機関砲の弾丸の炸裂音がしたりして、着陸に失敗して壊れる飛行機も出る。月光機の搭乗員も便乗してメナドへ帰る

づいて見ると風化した人糞らしい物に群がってこれを食べているのでした。これには気分が悪くなってしばらく食べる気がしなくなった。なるべく人気の無い場所から捕り、海水を入れた缶の中で二、三日飼ひ、そして食べた。私の仕事は二人分の食事と少尉の洗濯が主で、そのほか銃の手入れくらいであった。

そんなある日、忘れることが出来ないことが起こった。昭和十九年十二月二十四日の午後クリスマスイブの日であった。

―絨毯爆撃―

その日は穏やか日中で昼食を終え、後片付けをして一息ついていると、いつものようにモロタイ方面から爆音が聞こえて来た。急いで海岸に出て見るといつもより爆音が大きく重い、大きな機影が見えるまでスクールの黒雲のように海岸線の上のしかかかって来た。「変だぞ」と宿舎に駆け戻り、少尉に知らせ、鉄帽を被り「被甲」を持ち、一人用の蝟壺の側に立って見上げると、大きな四発の

機会が来なかった。そんなことで我々もずるずると長引いてしまった。

一週間置きにロロバダの本部まで、カウ飛行場の端を通り小山を越えて食料受領のため通った。その飛行場は数日前の爆撃で、付近の木は倒され、焼け焦げた異様な臭いが漂う。まだ完治していない脚気の不自由な足を引きずり、山中の倒木を跨げず腹ばいになって越したことも幾度か、今思い出しても情けなくなりますが。でもこの地獄のようなハル島を出てメナドへ行けば蒔苗隊長もおられると希望をつないで毎日を過ごした。

近くの部隊にハーモニカで有名な奥田宗宏氏について青木少尉の希望で聞かせて貰ったこともある。私の宿舎の海岸寄りに他部隊の五、六人の通信隊がいて、たいした仕事とでもなく、小銃でカモメや海鳥を捕ったりしていた。毎日それを見物したり、おかずのヤドカリを捕ったりして呑気に日を過ごしていた。海岸に出てヤドカリを探すと、ヤドカリが群がり集まっているところがある。近

爆撃機が悠々と飛んでくる。爆撃慣れしている私もこれには首を縮めた。

「見たこともない大型です、また飛行場でしょ」と言いながら見上げていると、爆弾倉が開いて瞬間黒い爆弾がヒュルヒュルと、まるで怪鳥の叫びのような落下音が聞こえバラバラ落ちて来る。慌てて蝟壺へ飛び込み耳と目を押さえ口を閉めてうずくまる、と同時に身体が蝟壺の壁にガガンと叩き付けられ、頭の上に土砂がバラバラ落ちて来て息も出来ない状態だった。

爆音も遠ざかり恐る恐る頭を上げると、隣の蝟壺の少尉も無事だった。置き忘れた「被甲」はどこかへ吹き飛んでしまった。椰子の梢は全部吹き飛び、幹は破片でぶたぶたになり、宿舎の屋根もほとんど無くなっていた。

機影に気を取られていたが、間一髪のことだった。呆然としているとまた爆音がする。空を見上げると今爆撃した宿舎の百メートル位奥を爆撃している。

ようやく終わり、爆音を轟かせながら悠々と海上の彼方へ飛び去って行った。

「今回は酷かった」「命拾いをした」などと話しをしていると沖合でUターンしてまたこちらへ来る。今までの爆撃と直角の線で真上に来る。「危険だ、絨毯爆撃」だと直感した。少尉に声を掛け、先ほど爆撃を受けたばかりのところにある海軍の防空壕に夢中で駆け込んだ。ここはしっかりした壕である。数人の海軍の下士官が身を寄せ合っていた。入った直後爆撃が始まったが、この壕は天井に厚い鉄板が敷いてあり、瞬時の爆弾にはびくともしないと言われて一安心した。その後も幾波かの爆撃があつたが、いつもこの壕で過ごした。後で分かったが、この時の飛行機はB25だった。いつしか爆音も聞こえなくなり、炎の燃え盛る音だけとなった。敵機はモロタイへ帰ったようだ。海軍の方に礼を言つて宿舎へ帰ると、宿舎は完全に倒壊し、椰子の木もほとんど倒れて、そこは明るい広場に変つていた。蛸壺は半分も埋まっ

途中、掘割の丸木橋を渡ろうとして、足を滑らせ、谷川に落ちてずぶ濡れになった青木少尉の姿は、笑うに笑えず、情けない姿だった。

―夜光虫―

ワシレの派遣隊へ帰隊後も、青木少尉はメナドへの帰還を諦めず、あちらこちらへ連絡を取り、カウ湾の奥の西側のテルナテと言う小島からメナドへの便船が出ることを聞き込んできた。少尉は、ここにおいても仕方がない。

「乗れば連絡するから、追及して来い」と言い残して、一人でワシレ湾の奥の連絡所へ出発した。数日後「便が来るらしいから追及するように」と連絡が来た。派遣隊の隊長は「当てにならないからここに残っていたらどうだ」と言ってくれたが、今更少尉を一人にする訳にもいかず、私自身もここから出られるならそれにこしたことはない」と、食料を貰いに出発した。

小銃はここに置き、雑囊、飯盒、水筒、帯剣そして少尉が置いて行った南部九四式自動拳銃の軽

ており、あのままここにいたらと思うと、神仏の加護を感謝するほかなかった。

宿舎の前の海岸に出ると、送信所の屋根は飛ばされていたが健在で、兵隊が海に入り、爆弾で浮いた魚を拾っていた。私も魚を拾った。誰かが叫んだ。「これはクリスマススイブのルーズベルト給与だ」。

あれほどの爆撃でも人的被害はあまりなかった。ただ近くの部隊で用便中、破片で一人戦死、数人の怪我人位で済んだ。飛行場は徹底的に叩かれ、当分使用不能とのことだったので月光機も来なくなり、便乗の機会もなくなった。

私達もここにおいても仕方がないので、ワシレの派遣隊に帰ることにし、その晩はルーズベルト給与に預り、壊れた宿舎に泊まり、ここでの最後の眠りに就いた。

翌日、二人は爆撃で歩き難くなった山路を、例の生木の焼ける嫌な臭いに追い掛けられるように本部へ向かった。

装で出発した。拳銃は吊りバンドで肩から吊るして腰に付けた。ワシレから海岸沿いに西に向かった。その夜は途中の部隊へ訳を話して泊めて貰い、食事は米を持って行ったが、炊さんは面倒だろうからと食事を御馳走してくれた。朝食も御馳走になり、昼食のおにぎりまで持たせてくれた。

継子扱いだった派遣隊でのことを思い出し、この部隊の温情に涙が出るほど嬉しかった。拳銃を下げていたので憲兵と勘違いしたのかも知れない。

二日目も歩いた。その夜も途中の部隊へ宿泊をお願いしたら「今夜、そこまで行く船がある。乗って行ったら良い」と言われ便乗させて貰うことにした。大急ぎで食事をして九時頃出発した。乗員は連絡に行く下士官、漕ぎ手は現地人二人そして私の四人である。明け方によく目的地に着いた。そしてワシレ湾の奥の連絡所少尉に会う。二、三日して船便が遅れるとの連絡が入った。そこでサンパンで送って貰い、一昼夜でワシレに帰った。

隊に帰ったら派遣隊長は「それ見る。言わんことじゃない」というような顔をした。一、二日後の夜便船が入った。十数人連れあって連絡所から星明かりの中、小山を越えて西側に出る。見ると下の栈橋に十数トンの漁船がポンポンと焼玉エンジンの音を響かせて横付けになっている。薄暗いランプの下で停泊場大尉が一人一人の名前を呼んで乗船させている。青木少尉は早々と乗船したが、私の名前は最後まで呼ばれなかった。青木少尉は自分が乗船したら部下の乗船を確認するのが普通と思うが「私の部下の五十嵐も乗せてやってくれ」の一言もなく、情けなさ無念さを感じ涙がこぼれた。

この時、船上で黙って見ていた船長が突然「司令官、メナドから五十嵐も連れて来るように命ぜられております。乗せてやってくさい」と叫んだ。地獄に仏とはこのことで船長が気の毒になって乗せてくれたのか、蒔苗隊長が命じたのか、乗れた嬉しさと喧騒に紛れて分からず仕舞である。船は

中をメナドに向けて出航する。夜が明けて船を木陰に隠すためには、入り江が浅く海底を掘るのに兵隊に手伝ってくれと船長に言われ、四、五人の兵隊と早速禰一本で飛び込み、太い鉄棒で海底を突いて掘った。海水はそう冷たくなく、底は珊瑚礁なので、二時間位で済ますことができた。

作業が終って、昼は鰹と鶏の豪華な食事で喜びだった。その夜突然、船はハルマヘラへ戻ることになった。それは敵の警戒が厳しかったためか、ほかの事情かは私達兵隊には教えてくれない。

ついにメナドへの脱出も夢に終り、また派遣隊の穴蔵の中のような生活が続いた。あのこと以来、青木少尉とも気まづくなつて、私は喜んで赴任した。

場所は、ワシレの対岸のロロバタの第二十九航空司令部本部の井上連隊に転属である。体も健康を取り戻し、新しい勤務に着ける喜びを感じた。久し振りに完全軍装でワシレ港から、腰がしびれるほど震動するドラム缶で作った大発艇でカウ湾

エンジンの音も忙しく栈橋を離れ真暗な沖へと向かった。

―魚雷艇―

船は真つ暗闇の海上を灯火も付けず、忍びやかに手探りするように進んで行く。どのくらい走つたろうか、突然エンジンが止まった。「敵の魚雷艇だ、静かに」低いが強いの船長の声がした。見付れば攻撃されるのは必至だ。無防備の船なんか、たちまち撃沈されてしまうだろう。それぞれ甲板に身をかがめて息を潜める。波の音と心臓の鼓動だけが一際響き、役に立つとは思えないが小銃を握り締める。

近くを通過する魚雷艇の高速エンジンの音が聞こえる。緊張の数が過ぎ、魚雷艇のエンジン音も次第に遠くなり、やがて聞こえなくなった。一様に深い溜息を付く。やがて船は何事も無かったようにポンポンとエンジンの音を響かせながら島陰に入り停泊した。ハルマヘラ島の西の小島テルナテである。昼はここで停泊し、また夜は暗闇の

を渡った。晴れ渡った海原が対岸まで見渡せ、右手の葉タバコの岬の先にぼんやりとモロタイ島の姿が霞んで見える。

どこで戦争なんかやっているのだろうと思えるのどかな風景が広がっている。新しい任地で頑張るぞと、希望に胸の膨らむ船出だった。

ここでは私の本来の仕事は自動車手である。ここでは運転手が少なく、最初トラックを運転したが整備不良でブレーキやハンドブレーキも利かず、酷いのはクラッチも利かない。

ある日、浜辺の漁労班に塩を取りに行った。浜の中ほどで海に向かって車を止め、少しばかりの塩を積み帰ろうとエンジンを掛け、ギヤを抜くと、下り坂の砂浜を海に向かって車が走り出し、サイドブレーキを引いても止まらず、アツという間に波打ち際に浮いていた。ドラム缶がフロントバンパーの下に食い込み、ようやく止まった。

前のタイヤはすっかり海中に浸かり、私はドアを開けて飛び出す寸前であった。もしドラム缶が

無いか、そのまま押し出していたら、車一台オシヤカになるところだった。このままではいつ事故が起きるか分からないので、一日整備の時間を貰い、徹底的に整備をすることにした。

―車整備―

エンジンは大丈夫だがブレーキがほとんど利かない。分解して見るとライニングは摩滅してはいないがまだ使える。調整してオイルを足してエアを抜けば良いと思って、ブレーキオイルを探したが、どこにも無くて困った。たくさんあるエンジンオイルは鉱物油なので駄目だが、植物油なら良いだろうと椰子オイルを使用したらブレーキも調子良く利くようになった。それ以来安心して運転することが出来た。

司令官の日産の乗用車も整備して、以来古兵と交替して運転することになった。古兵も司令官の命令であるし、心底、私の整備能力を買ってくれたと見えて文句も出なかった。

ある日、司令官を乗せて海岸道路を走行中、敵

ならない。

その頃の戦況は悪化の一途をたどり、硫黄島は玉砕し、米軍は沖縄へも上陸し激戦が続き、第四航空軍本部も台湾に転進した。昭和二十年春から第四航軍の隷下になった。

我が第二十九航空地区司令部の仕事もあまりなく、戦局はこのハルマヘラ島を飛び越して日本本土に迫っていた。

そこで各隊とも食料の自給体制に入った。私の仕事もなくなり、兵五人と畑の場所選定をするように言われて、指定された山中に入った。開墾には五人のうち二人は一年先輩で、身体もがっちりしていたが、二人は補充兵で、体格も劣っていて仕事はきつかった。雑木が多く、根を抜くの之間が掛り、付近には水場も無く開墾には不向きな場所だった。

あまり農場には適さないことを報告すると別な場所を指定された。指定された場所には大木は有るが、数は少なく、灌木も細く根こそぎ引き抜け

機の爆音が聞こえたので急いで大木の下に車を突っ込みことなきを得た。司令官が「どうして空襲が分かったか」と聞かれたが返答に困った。その後の経験で車のエンジン音と飛行機のエンジン音が同調して変って聞こえるのだ。あの夜間メナドへ向かう漁船で船長が逸早く魚雷艇の接近を知ったのもこうゆうことだったかも知れない。

こんなことで司令官の心証が良かったのか上等兵に進級した。司令官を乗せているんな部隊に行つたが、その中に海軍の部隊の風間隊があった。私は入口の衛兵所で待っていたが、司令官は酒を御馳走になるらしく、いつも機嫌良く出てくる。

海軍は船をもっているの、給与も良く、部屋には畳が敷いてあり、羨ましく思った。

復員後初めて旧中学校の同窓会を聞いた時、ハルマヘラ海軍という話し声が聞こえた。良く聞くと風間真君がハルマヘラ島の海軍の分遣隊の風間隊の隊長だったそうで、あの風間隊の隊長は彼だったのである。当時会っていたらと思うと残念で

る。水場も溜り水だがあり、ここを農場にすることなつた。それから本部に若干の兵を残し魚業班と農耕班に別れ、魚業班は海岸の設備を拡張して人員も増やし、魚業と製塩を、農耕班はワシレの派遣隊員も加わり山に入った。ここでワシレで別れた道路部の戦友とも再会出来て懐かしかった。彼等も元氣になり仕事に耐えられそうだ。

農場は海岸から五、六キロ山に入ったところで本部から海岸を北上し、大きな川に沿って左岸を遡行した。対岸の坂を一キロほど上ったところに早速、宿舍や隊長室も建て炊事場も造った。隊長は寺田准尉で全員で三十人位だったろうか。毎日開墾に励んだ。大木は適当に切り乾燥し、雑木は引き抜いて大木と一緒に燃やした。その後をスコップで掘り起こして畑にした。木を燃やすと、煙が上がる心配をしたが、反撃のないのに安心したのか空襲は余りなかった。

スコップで畔を造り、現地で見付けたさつまいもの苗をスコールの最中に植え付けた。収穫まで

には三カ月掛かる。そのうち米も少なくなり、一人一食盃一杯の配給になってしまった。仕事は重労働、食料は少なく、皆痩せ衰えてしまった。

自生のタピオカ芋やさつま芋の蔓る等で雑炊を作り餓えを凌いだ。ほとんどの者が栄養失調で肋骨も現われ、痩せて下腹ばかり張り出した身体、手製のわらじ履きの姿は見られた格好でなかった。

―炊事班長―

器用さのためか、体力がないためか、炊事班長を命ぜられた。部下二人と一カ月とのことだったが復員まで続くこととなった。今までは食べさせてもらった方だったが、今度は食べさせる役となった。ろくな食材もない炊事当番ほど辛い仕事はない。部下二人と手分けして、時間の許す限り食べる物を発見、収集に当たった。タロ芋、タピオカ、青い三角バナナ、パイア等が皆の胃袋に納まるのである。

ある日、部下がこんなことを聞き込んで来た。先日トベロの近くで米の集積場が空襲を受け、焼

いしく食べられた。それからはこの餅を三日に一度は出すようにした。

雑煮は旨いがやはり「だし」が旨くないと駄目で、牛缶のあるうちは良いが、無くなった時のことを考え鶏を農場内で放し飼いにした。

雛も生まれていつも何羽かいて、炊事場付近で遊んでいる。ある日、例の如く餅搗きをしていると、臼の縁に飛び乗った雛が臼の中に落ちてしまった。慌てて摘み出して見ると片足が折れている。

「御免、御免」と謝りながら、添木を当て、包帯をして放したが、数日後びっこを引きながら遊んでいるのを見ると、足が前後逆に着いてしまっていた。人間だったら大変なことだ。なんか哀れでこの鶏だけは最後まで食うことができなかつた。

能率的な卸し金が出来たので、今度は間食作りに挑戦した。さつま芋を卸し水分を絞り、タピオカ澱粉を少し混ぜ、蒸し器で蒸すと旨いカステラができた。三時の間食に最適で大変喜ばれた。副食は、パイアの根の大根漬け、さつま芋の蔓の蕨

け米の山になっていると言う。腐った米は食えないが、焼けた米なら食えるかなと携帯天幕とスコップを持って二人で出掛けた。それで早速餅を作って昼食に出すことに決め、臨時の使役を三人出してもらい、乾パンの空き缶で作った大きな卸し金でタピオカを卸し、水で沈殿させて澱粉をたくさん作り、それをドラム缶で作った蒸し器で蒸し、臼でついて餅にして雑煮を作った。「これは旨い。毎日作ってくれ」と言われたが、使役が大勢必要だし、タピオカの量も大変だ。そこで部下一人を連れて飛行場に行き、破損した友軍の「慣性始動機」(ハンドルを回し中のハズミ車を高速回転させ、惰力をつけて飛行機のエンジンを始動する部品)を外して来た。

それを炊事場の柱に取付け、ハズミ車に付けたドラム鉄板製の卸し円盤に一人がハンドルで回し、一人がタピオカを持ち擦りおろす。二人だけでも相当な能率が上がった。タピオカの澱粉だけでなく、さつま芋の澱粉も作って混合し、餅にしてお

漬け、茄子の味噌汁など、その他名前も分らぬ現地の野菜で豊かではないが原始時代そのままの生活がしばらく続いた。

―終 戦―

昭和二十年四月には不沈戦艦と言われた「大和」が沈没し、六月には沖繩が玉砕した。このハルマヘラ島には大規模な攻撃こそないが、のど元のモロタイ島には米軍が上陸して船舶の出入は出来ず、制空権も失い、孤立したハルマヘラ島をからかうように空襲を行ったり、夕方ジャングルのむこうの空を艦砲射撃の砲弾が黄色い尾を引いて何発も飛んだりした。

空襲があると、慌てて上半身裸のまま鉄帽を被り、岩の角に背中を打ち当て摺りながら、天然の珊瑚礁の狭い洞窟へ潜り込んだ。勇敢な者もおり、軽機を畑の真中の切り株に据え付け、敵機目掛けてバリバリ撃ちまくる者もいた。

やがて一年も前からひそかに囁かれていた終戦の日が来た。八月十五日昼前、敵戦闘機が飛来し

て終戦のビラを舞いて行った。読んだが誰も本気にせずいたが、隊長の寺田准尉が全員集合を掛け「戦争は負けた。降伏したくない者は脱走しても構わん」と涙声で語ったが、我が隊からは一人の脱走者もなかった。戦争は負けた。ついに頼みの神風は吹かなかった。日本本土はどうなったのだろうか。誰もが仕事に手が着かずする気も無くなり、無気力の感じだった。

その夜は灯火も明るくし、かがり火を焚いて、陣中酒（航空燃料のアルコールに金平糖をとかして湯で割った物）を酌み交わし、夜の更けるのも忘れて無念がり、あるいは今命のあったのを喜び合い、故郷のこと、家族妻子のことなど話し合った。

しかし、本当に故国日本へ帰れるのだろうか、いつ頃帰れるのか、あれこれ思って一晩眠れなかった。地獄から生還したような気持ちになったのは私だけではあるまい。

― 武装解除 ―

かりとなった。

昭和二十年も間もなく終りに近づいたが復員話は何もない。本当に故国へ帰れるのだろうか、心の中に疑問と不安が頭を持ち上げるがなんの連絡もなく、ただ待つこの生活となり、何となく気力も落ちてくる。

― 復員 ―

昭和二十一年の正月も近くなった。ここで最後の正月になるかも知れない、最後にしたい。ここには神社がないので神社を造ろうと思ひ取り掛かった。皮を剥いだ細木で神社風のほこらを造り、空き缶で屋根を葺き、正面に空き缶を丸く切り抜いて菊の紋章を型取った座金を取り付けて、靖国神社のつもりである。宿舎の前の大木の下に鎮座して貰う。

酒とドラム缶風呂を手分けして準備した。我々炊事係が雑煮を担当し、歳夜の午後から掛り、夕方にはほぼ出来上がった。夕方、二人づつ交替でドラム缶の風呂に入り、酒を酌み交わし、軍歌を

終戦命令が出てどのくらい過ぎたか記憶にないが、ここハルマヘラには占領軍の進駐はなく、日本軍の自治にまかせられていた。

付近の部隊の武器弾薬が海岸に集められて、オランダ兵が数人立会い、小銃や弾薬は棧橋の突端から海に投げ入れた。拳銃、機関銃、双眼鏡、それに軍刀は没収のため別にされた。大型の砲や車両等は現地で爆破されたようだ。私は接待要員とされたが別にすることもなく使役の兵隊達が束ねて棧橋の突端から海に投げ込むのを呆然と見ているだけであった。

没収された兵器は、世界でも優秀な物なので、オランダ軍もその価値を知っているからだろう。軍刀の中には先祖代々伝来された名刀も有ったことだろうと思うと、敗戦の口惜しく情け無さに涙が流れるのを禁じえなかった。

武装解除も終り、また農耕の生活に戻った。階級章は無くなったが団体生活上、復員まで階級生活を続けることとして、復員船の来るのを待つば

合唱し、夜中の十二時に全員で手作りの靖国神社に拝礼し、健康と無事帰還を祈り、最後は神社を回って会津磐梯山の盆踊りでお開きにした。

五月半ば待ちに待った復員の知らせが入って波止場近くの砂浜に集結した。鉄条網で囲まれた天幕の中で厳重な持物検査があり、時計、万年筆、食器の一部まで没収された。

五月二十日頃、リバテ―型の貨物船に乗船し、夕方棧橋を離れ北に向かって出航した。船はアメリカ船だが船員は日本人で「ご苦労さんでした」と言われ「本当に日本へ帰れるんだなあ」と心からしみじみと感じた。日が暮れるにつれて頭上には南十字星が宵闇の中に輝き、辺りの山々が薄墨で描いたような暮れ染めたカウ湾を北上し、あの月光機が攻撃し、切り込み隊や分遣隊の多くが戦死したモロタイ島の側を黙祷を捧げて通過し、船は真つ直北へ進んだ。

船は次第に日本に近づいて、乗船して十日間、私達の心を汲んでか、船はどこへも寄らず、五月

三十日明るく晴れ渡った紀州田辺港の岸壁に静かに接岸した。

―あとがき―

戦後の記録では、ハルマヘラ島が第二次防衛線に当てられたが、米軍はモロタイ島を攻略し、本島は爆撃のみで抑制しつつフリーピンへ進撃したため、我々は助かったのだと分かった。

運隊の幸運を感謝する。夢にまで見た復員船に乗船できて、嬉しさの余り、気がおかしくなり、「うるさいぞ」と怒鳴られながらも、一晩中、甲板でタップダンスを踊っていた若林上等兵、内地間じかになって、夜の間、自慢の黒革の長靴を海に投げ捨てられたという。

青木少尉、今となつては、ただ気の毒に思うばかりである。第二線部隊のため、余り犠牲者もでなかった我が部隊に比べ、甚大な人的損害を出した第一線部隊の亡き将兵に対し、心からご冥福をお祈りすると共に、このような悲惨な戦争の根絶を祈念し、戦後六十年の平和な我が国を作られた

のは、幾百万の英霊のご加護の賜物であり、さらに恒久的に平和を尊ばねばならないと願っています。